新資料『台湾愛国婦人』第六十一巻

――与謝野晶子と雑誌の関わりを中心に――

下岡友加

はじめに

愛国婦人会は婦人運動家・奥村五百子の提唱により、戦死者の遺族や傷痍軍人の救護・慰問などを目的として明治34年に創設された団体である。台湾では明治38年、台北の台湾総督府構内に台湾支部を設置し、活動を開始した。その愛国婦人会台湾支部が明治41年10月から大正5年3月に渡って発行した機関誌が、『台湾愛国婦人』である。最も多い年（大正3年）で年間八万六千百七十五部が台湾島内に配布された[1]。発刊から三年後の明治44年には、広告を含めると三百頁近くの分量を備え、当時としてはかなり大部の雑誌となっている[2]。〈内地〉の愛国婦人会の機関誌『愛国婦人』（明35・3～昭17・2）が、大正9年12月に至るまで新聞形態を取っていたのに比して、『台湾愛国婦人』は第二巻（明42・1）以降、月刊雑誌となり、終巻までその形態が維持された。

既に別稿で明らかにした通り[3]、『台湾愛国婦人』は台湾統治初期総督府の政策履行、特に「理蕃五カ年計画」と呼ばれる山地制圧事業における後援・広告塔の役割を担った雑誌と位置づけられる。〈帝国〉日本の植民地支配の実態の一端を知るに重要な資料である。また、この雑誌は同時代の著名作家の作品を多く掲載していることでも注目される。たとえば広津柳浪、泉鏡花、徳田秋声、三宅花圃、内藤鳴雪、伊藤左千夫、土屋文明、与謝野晶子、与謝野寛、長谷川時雨、国木田治子、尾島菊子らの寄稿は頻繁に確認できる。〈外地〉の雑誌に、著名な〈内地〉作家の原稿を常時掲載することは、愛国婦人会台湾支部の会員獲得のための誌面充実につながり、また愛国婦人会及びその後ろ盾である総督府の権威づけに寄与する方策であったと考えられよう[4]。この雑誌に見える〈内地〉作家たちの寄稿は、〈帝国〉日本の領地拡大とともに、文学の市場がそのまま〈外地〉へと広がった様相を如実に示

している。

しかし、右のような実態を精査するには、この雑誌の所蔵自体が極めて限られ、かつ資料が揃っていないという課題が存する。これまでに確認された雑誌は全八十八冊のうち五十一冊に止まるが、[5] 稿者は新たな一冊である第六十一巻（大2・12）を確認した。そこで、本稿では新資料・第六十一巻の目録を掲げるとともに、同巻に掲載された主要な記事について報告したい。特に取り上げたいのは、これまで初出不詳とされてきた与謝野晶子の詩（『夏より秋へ』金尾文淵堂、大3・1所収、無題・詩番号97）が当巻に掲載されている点である。詩の初出と単行本との異同、さらには晶子と『台湾愛国婦人』との関わりについてこれまでに明らかになったところを述べる。第六十一巻の発見により、後半の第六十巻（大2・11）から第八十八巻（終巻、大5・3）まで二十九冊連続したかたちで検討することが可能となった。

なお、当巻資料の所蔵者は、財団法人半線文教基金会台湾文化資料館館長・劉峰松氏である。資料は電子データ化のため、台湾南投にある国史館台湾文献館に保管中であったが、劉氏のご配慮により、特別に閲覧がゆるされた。

一　第六十一巻目録

ここでは、まず第六十一巻の目録を掲げる。他巻の構成同様、当巻も日本文及び漢文欄から成るが、今回は紙幅の都合により漢文欄は省略した。巻頭には大量の広告（八十四頁に及ぶ）が掲載され、本文部分はその広告の後から始まっている。

凡例

一　漢字は新字体に改めた。

二　目次と本文に相違がある場合、明らかな誤植を除き、本文の表記及び掲載順に従った。

『台湾愛国婦人』第六十一巻（大正二年十二月一日発行・20銭）

何故に女子の独立問題高等教育問題が起りし乎　法学博士　浮田和民
植民地には旧式の婦人が良い　宮尾舜次
家庭に於ける趣味　桜井美
軍国の婦人　西門老人
吾が師　三宅花圃
新派歌壇の近勢　静花

回顧五年　婦人問題の一転機　依田信太郎
過去五年間に於ける女性の変化に驚く　後藤進二
混合教育の利弊　西山悊次
五年前に見た独逸の家庭　丘の人
新刑法と旧刑法　花井卓蔵
嗚呼五年前　山下千代雄
子供のある御婦人方に　小林臨水
結婚の歴史に就て　宮古啓三郎

家庭

茶の湯独習　星野宗悦
花の栞　此君庵耕斎

園芸

秋に下す種子と球根　SY生

文芸

波の戯れ　徳田秋声
酒場の一夜　与謝野晶子
生活　筒井吉久
不思議な接吻　小林徳三郎
竹囲詞壇詠草　桐廼家かつら
桐廼舎当座会　西川芳子
夢

小品文　尾島菊子選
図書倶楽部／懸賞新題
秋期小集の記／新刊紹介
愛国婦人会台湾支部報

講談

春日局　蓁々斎柏葉
乃木大将閣下正伝　渡辺政徳

落語

御授け結婚　青松亭有楽
五万歳　渡辺柏葉
口絵　柏木の雪　尾島則義筆三色版
東伏見宮殿下尊影　他数十葉

附録小説

幼きころ　尾島菊子

同時期に刊行された他巻に比して構成上の異同は特にない。評論（エッセイ）「回顧五年」は刊行五年記念号である前巻（第六十巻）からの企画を引き継いだものである。

当巻には、徳田秋声の長編小説「波の戯れ」の十一～十七章が掲載されている。続きは既に発見されている第六十三巻（大3・2）、第六十四巻（大3・3完結）に載っている。十章より前の内容は、未発見である第五十六巻（大2・7）、

及び第五十九巻（大2・10）に掲載されていると考えられる。兄妹のように育った友蔵・おまつと東京から来た画家の友野芳雄の間に生じた、一種の三角関係が描かれている。

雑誌末尾に置かれている附録小説は、秋声の弟子である尾島菊子が担当している。この小説は第五十二巻（大2・3）の掲載開始から断続的に発表され、第七十三巻（大3・12）に至り、ようやく完結している。未発見巻への掲載分があるため、部分的にしか読めないが、前篇・中篇・後篇の三部構成を持つ、かなりの分量を持つ長編小説である。当巻には、中篇の十一～十五章が掲載され、主人公の「私」＝清子が世話になっている従姉夫婦の勧めによって結婚したものの、それが破れる経緯と、医者の卵である松木という男性との新たな恋が従姉に露見し、妨害されるまでの様子が語られている。菊子自身の経歴に基づいた自伝的な小説と考えられ、語り口も訴えかけるような力強さを持ち、質・量ともに菊子の創作を代表する作品であることは疑いない。

但し、右のような秋声や菊子の長編小説掲載について、望ましくないとの声も雑誌には寄せられている。雑誌に度々寄稿している博文館理事・坪谷水哉は「読者を繋ぐ為に数号に連なる面白き読物一篇あるは宜しきも、近頃の如く徳田秋声、尾島菊子二氏の小説の何れも長く続くことは亦一考を要すべし」と苦言を呈している（第六十三巻「本誌に対する諸名家の感想」大3・2）。愛国婦人会の支部報という、地方発行の一機関誌でありながら、文芸欄が商業雑誌並に肥大化している点にこの雑誌の一つの特色があるのだが、それゆえ誰にどのような寄稿を依頼するのか、好みの分かれるところと言えよう。

三宅花圃のエッセイ「吾が師」は昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書51』（昭和女子大学、昭55・11）著作年表からは漏れている。自身の「お師匠様」として跡見花蹊と杵屋六の名を挙げ、ここでは三味線の師匠である杵屋の人格、気品の高さについて主に語られている。

「懸賞新題」の後に掲げられた「新年号予告」には、「島崎藤村氏作　或男の話／与謝野晶子氏作　正月まへ／泉鏡花氏作　鳥笛／徳田秋声氏作　紫陽花の窓／アンドレーフ氏作　永遠の子」といった内容が大きな活字で組まれている。実際には、藤村の作品[6]は第六十三巻（大3・2）に、アンドレーフの作品は六十四巻（大3・3）に、その他は予告通り、次号（新年号）第六十二巻（大3・1）に掲載された。こうした予告内容からも、当雑誌が文芸を呼び物として位置づけていることは明白である。

二　与謝野晶子「酒場の一夜」

与謝野晶子の詩「酒場の一夜」は、四章から成る七五調の定型詩である。詩の内容と末尾の注記「（一九一二年九月巴里にて）」に明らかなように、晶子が寛の後を追って欧州を訪問した際の経験をもとに生まれた作品である。単行本『夏から秋へ』の「下の巻」所収の際、無題となり、代わりに詩番号XCVII（97）が振られた。また、単行本では五章構成に改められている。

雑誌掲載本文を次に掲げる。単行本『夏から秋へ』との異同がある場合、単行本の本文を下段の（　）内に示した。殆どは表記の改変である。単行本の誤植と考えられる異同についてもそのまま記し、ルビは省略した。傍線は私に付した。

酒場の一夜　（→XCVII（97））

（一）
閾を内へ跨ぐとき、
墓窟の口を踏むやうな
暗い怖えが身に迫る。
煙草のけぶり、人いきれ、
酒類の匂ひ、灯の明り、
黒と桃色、黄と青と……
あれ、はたはたと手の音が
キモノ姿に帽を著た　（→きもの姿に）
わたしを迎へて爆ぜ裂ける。
鬼のむれかと想はれる
人の塊、そこかしこ。
もやもや曇る狭い室。

（二）
淡い眩暈のするまゝに　（→眩暈のするままに）
君が腕を軽く取り、
物珍しくさし覗く　（→物珍らしく）
知らぬ人等に会釈して、
扇で半ば頬を隠し、
わたしは其処に掛けて居た。
ボウドレエルに似た像が　（→バウドレエルに）
荒い苦悶を食ひしばり、　（→食ひばり、）＊単行本原文ママ
手を後ろ手に縛られて

煤びた壁に吊された、
その足もとの横長い
粗木づくりの腰掛に。

（三）

『この酒場の名物は、
四百年へた古家の
きたないこと、、剽軽な
また正直なあの老爺、
それにお客は漫画家と
若い詩人に限ること、
そして主人も客達も
毎夜、朝まで飲み明し、
歌ひ明して遊ぶこと。』
こんな話を友はする。

潤い短袴の大股に
老爺は寄つて、三人の
日本の客の手を取つた。
伸びるがま、に乱れたる
髪も頬髭も灰白み、

（→煤びた壁に）＊単行本原文ママ

（→「この酒場の）

（→きたないことと、）

（→若い詩人に限ること。」）
（→削除）
（→削除）
（→削除）

（→一行空け）
（→（四））
（→股衣の大股に）

（→伸びるがままに）

赤い上被、青い服、
それも汚れて裂けたま、。
太い目元に皺の寄る
屈託のない笑顔して、
盛高の頬と鼻先の
林檎色した美くしさ。

老爺の手から、前の卓、
わたしの小さいさかづきに
注がれた酒はムウドンの
丘の上から初秋の
セエヌの水を見るやうな
濃い紫を湛えてた。

（四）

『聴け、我子等』と客達を
叱るが如き叫びごゑ。

老爺はやをら中央の
麦稈椅子に掛けながら、
マンドリンをば膝にして、

（→裂けたまま。）

（→美くしさ）＊句点削除

（→小さい杯に）

（→（五））
（→「聴け、我が子等」）
（→叱るやうなる叫びごゑ。）

『皆さん、今夜は珍しい　（→「皆さん、）
日本の詩人をもてなして、
ヱルレエヌをば歌ひましよ。』（→歌ひましよ。」）

老爺の声の已まぬ間に　（→声の止まぬ間に）
拍手の音が降りかゝる。　（→音が降りかかる。）

赤い毛をした痩形の
モデル女も泳ぐよに
一人の画家の膝を下り、
口笛を吹く、手を挙げて。
（一九一二年九月巴里にて）
（→（巴里モンマントルの「暗殺の酒場」にて））

晶子と寛のパリにおける下宿先はモンマントルにあった。晶子は、「モンマルトルと云ふのは、山の様に高くなつた巴里の北の方にある一部の街で、踊場や珈琲店、酒場などの多い、巴里人の夜明し遊びをして来る所と成つて居る」[7]（「欧州より（一）」『婦人画報』第72号、大元・8）と述べており、詩はまさにそうした遊興の空間独自の雰囲気を伝える。

この詩は、明治45年6月15日の晶子の実体験をもとに書かれたと考えられる[8]。その根拠は、与謝野寛の書いた紀行文「暗殺のキヤバレエ」（『東京朝日新聞』明45・7・13）である。この寛の文章は6月17日の日付を持ち、「暗殺の酒場」へ「一昨日の晩晶子を伴れて画家の江内と一緒に僕が行つた時」のことを語っている。「画家連中と来て居るモデル女の幾人は席が無いので若い画家の膝を択んで腰を掛ける程の大入であ」ったこと、「老爺は日本服を着けた晶子の来たのを喜んで、早速ギタルの調子を合せてヱルレエヌの短詩を三つ続けざまに歌つた」ことなど、内容が晶子の詩と一致する。酒場の様子も、次のように詩と同様である。

「暗殺の酒場」へ初めて来た人は事毎に驚く。第一前に述べた来る路の淋しさと物凄さに驚かされて居る処へ、四百年以上経て居ると云ふ古い建物の酒場が、石と土とを混ぜて築き上げた粗末な壁の二室しかない平家で、老主人夫婦と一人の給仕女との三人の家族の住む方は土地の傾斜の儘に建てられて薄暗い窖の様に成つて居るし、客の席に当てた一室は纔十畳敷程の広さで、冬になれば頑固な石の暖炉へ今でも荒木を投げ込むので何処を眺めても煤光に穢く光つてゐる中へ、正面に両手と両足を縛られた男の大きな塑像が之も煤と塵に汚れて哀し相に痩せこけた顔を垂れ乍ら天井からぶら下る。四方の壁には昔から此処で飲んだ幾多の漫画家の奇怪千万な席描が縦

横に貼られ、傷だらけの薄穢い荒木の卓の幾つと粗末な麦藁の台の椅子の二十許りとが土間に散らばつて居る。[9]

「酒場」を詠み込んだ別の晶子の作品には、『夏より秋へ』所収の「酒場の地獄の給仕かのこともその日の業も見透かして云ふ」という短歌がある。この歌の給仕や詩中の酒場の老爺は、怖ろしさも感じるような毒々しい世界の住人であるが、同時に鋭い洞察力や人柄の魅力も備えている。そうした姿を晶子は特に印象的に受容し、描く対象として捉えたと言える。詩は『夏から秋へ』所収後、昭和4年1月刊行の『晶子詩篇全集』（実業之日本社）にも収められたが、その際のタイトルは「暗殺酒鋪（キャバレエ・ダツサツサン）（巴里モンマントルにて）」と変えられた。

逸見久美に拠れば、『夏から秋へ』所収詩の初出不明は三編存するという。[10] つまり、今回の発見で初出不明の詩は残り二編（詩番号41・92）となったが、単行本における詩の配置順から考えて、未発見の『台湾愛国婦人』第三十六巻（明44・11）、第五十一巻（大2・2）がそれぞれの初出誌という可能性がある。

三　与謝野晶子と『台湾愛国婦人』の関わり

これまでに発見された『台湾愛国婦人』五十二冊（今回の第六十一巻を含む）中に確認できる晶子の掲載作品は、短歌三百三十三首、詩二編、小説四編、評論（感想）三編、古典の現代語訳三編（但し、「新訳紫式部日記」は雑誌の終刊により、途中までの掲載）にのぼっている。寛の作品も晶子ほどではないものの、評論三編、詩一編、訳詩三十編、翻訳小説一編が掲載されている。実際の作品名と掲載年月については、次の表の通りである。

表　与謝野晶子・寛の『台湾愛国婦人』掲載作品

巻数（刊行年月）	晶子の作品名・ジャンル	寛の作品名・ジャンル
第34巻（明44・9）	「初秋の歌」・短歌12首	
第37巻（明44・12）	「宮子」・小説 「秋より冬」・短歌19首	
第38巻（明45・1）	「芍薬」・小説	
第42巻（明45・5）		「男の歌へる」・訳詩2編
第44巻（明45・7）		「異国の花」・訳詩3編
第48巻（大1・11）	「巴里より」・短歌20首	
第50巻（大2・1）	「離愁」・短歌31首	「瑞西の旅より」・訳詩3編

第52巻（大2・3）	晶子自筆短歌1首 「ゆふぐも」・短歌30首		「薄暮」・訳詩2編
第54巻（大2・5）	「嗚呼サロメ」・感想 「幻影」・短歌30首		「別るる前夜」・訳詩2編
第55巻（大2・6）			「日本人の生活欲」・評論 「公園」・訳詩2編
第60巻（大2・11）	「飛行機」・詩		「耳環と鏡」・訳詩2編
第61巻（大2・12）	「酒場の一夜」・詩		
第62巻（大3・1）	「正月まへ」・小説		
第63巻（大3・2）	「本誌に対する諸名家の感想」・感想		
第65巻（大3・4）			「小曲数篇」・訳詩2編
第66巻（大3・5）	「新訳栄華物語」・現代語訳		「女に関する語源」・評論 「小曲三篇」・訳詩3編
第67巻（大3・6）	「皇太后宮を悲み奉りて」・短歌7首 「行く春」・短歌23首 「新訳栄華物語」補遺・現代語訳		
第68巻（大3・7）			「小曲二篇」・詩2編
第70巻（大3・9）	「新訳栄華物語」・現代語訳		「光耀」・訳詩3編
第71巻（大3・10）	「新訳栄華物語」・現代語訳		「夏の静けさ」・訳詩2編
第72巻（大3・11）	「昼餐」・小説		「哀歌」・訳詩1編
第73巻（大3・12）	「我の思へる」・短歌30首		「妻の死」・翻訳小説
第75巻（大4・2）	「新訳和泉式部日記」・現代語訳		
第76巻（大4・3）	「新訳和泉式部日記」・現代語訳		
第77巻（大4・4）	「新訳和泉式部日記」・現代語訳		
第78巻（大4・5）	「徳川時代唯一の女流小説家」・評論		
第81巻（大4・8）			「婦人に対する私の熱望」・評論
第82巻（大4・9）	「露草」・短歌25首		
第83巻（大4・10）	「秋の窓より」・短歌25首		
第84巻（大4・11）	「秋の窓より」・短歌25首		
第85巻（大4・12）	「落葉」・短歌25首		
第86巻（大5・1）	「春の初めの歌」・短歌30首 「新訳紫式部日記」・現代語訳		
第87巻（大5・2）	「新訳紫式部日記」二・現代語訳		「薄明りにて」・訳詩2編
第88巻（大5・3）	「新訳紫式部日記」三・現代語訳		「薄明りにて」・訳詩2編

＊第44、52巻は稿者未見。平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究』（研究代表者上田正行、國學院大學、平26・2）の記載に拠った。

雑誌（愛国婦人会台湾支部）と晶子・寛の関係の始まりについて、上田正行は、「ヨーロッパに行く直前の明治四十四年ぐらいからつながりができていたようです」と推定している。[11] 現在確認できる最初の雑誌掲載は、晶子の短歌が載った第三十四巻（明44・9）であり、それ以前の四十二、四十三

年発行の雑誌の多くが未発見の現状ではそう考えるより他ない。四十四年以降、終巻までコンスタントに晶子と寛、二人の作品掲載が行われている。

興味深いのは、右に掲げた表に明らかなように、晶子の作品が掲載されない巻に寛の作品が掲載されることが多いということである（第42、44、55、65、68、81巻）。これは晶子・寛の側の事情なのか、それとも編集者側の意図なのかは判然としないが、結果として夫婦でなるべく穴のないかたちで雑誌への掲載がほぼ常時なされていることになる。すなわち、晶子と寛は互いを補うことで、夫妻で雑誌の顔となっていると言える。[12] 第三十七巻（明44・12）には「在京記者」による「与謝野晶子女史を訪ふ」という記事も存する。そこでは、『台湾愛国婦人』へ「毎月何か送稿する積ですが」という晶子の言とともに、寛による「台湾と云ば愛国婦人は中々盛だネ、什麼して当地だつてあれだけの雑誌は少ないよ」「全くお世辞ぢやない、あれ丈のものを地方で発刊（だし）てゐるのは大に誇る価値があるよ」といった発言があわせて掲載されている。雑誌の読者である愛国婦人会会員は、基本的に有夫であり、晶子と寛という夫婦の寄稿者は、読者にとって親しみを感じやすい対象と言える。編集者側はそうした二人の価値を十分に理解し、重宝していたのではないか。

では、晶子と寛の側からすれば、なぜこの〈外地〉の機関誌に頻繁に寄稿を行っていたのであろうか。その一つの答えとして晶子自身の言が参考になる。大正二年八月以降（木俣修による推定、日付不明）北原白秋に宛てた晶子の書簡には次のように書かれている。「台湾愛国婦人と申すざつしは稿料がよほど多くくれ申候へば（かゝることわられたさに申し候は労に多くむくはれ候いみに候なれどはづかしく候かな）お小づかひになるべくぞんじ候。何か一ぺん二へん女のよみものらしきやさしきもの十五日位までにおゝくり下さらばとおもひ申し候。[13]」

晶子は原稿料の良さから（そうしたことを口にするのを恥じらいながらも）、白秋に寄稿をすすめているのである。[14] 『台湾愛国婦人』への寄稿時期は、『明星』廃刊以降、晶子が生活のため、様々な媒体に大量の作品を発表していた時期にあたる。雑誌が台湾総督府の後ろ盾のもとに刊行された官製雑誌であることを、台湾への渡航経験のない晶子が一体どこまで、またどのように認識していたかは今のところ不明だが、彼女にとっては経済的に大変ありがたいメディアの一つだったと言えよう。

香内信子は、晶子が「各メディアの特長を把握して、読者層も加味して、そこに見合う原稿を送っていた」[15]ことを指摘しているが、のちに単行本に収める作品を少なからず寄稿していることや、雑誌掲載の小説がすべて既婚者向けの内容

（夫婦の生活、出産、結婚といった題材）を扱っていることからも、晶子なりに誠実にこの雑誌の要求に応えていた様子は伺える。[16]

『台湾愛国婦人』と与謝野晶子（寛）との幸福な依存関係は、雑誌の終刊によって、あっけなく終わったが、彼らの仕事をより正確にはかるためにも、今後さらに一冊でも多くの雑誌を発見することが急務である。

注

（1）台湾総督府官房統計課『台湾総督府第十三統計書～第二十統計書』（明44・2～大6・1）参照。

（2）たとえば、第二十八巻（明44・3）の場合、広告八十二頁、日本文百七十六頁、漢文三十六頁で構成されている。廃刊前年の大正4年には、広告を含めて各巻常時二百～三百頁であり、その内、漢文欄が約四分の一程度を占める。

（3）拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の史的位置―新資料・第六十巻を中心に―」（『日本研究』第22号、平21・5）、拙稿「『雑誌『台湾愛国婦人』の性格―プロパガンダ、そして近代文学発生の場として―』（『県立広島大学人間文化学部紀要』第5号、平22・2）参照。

（4）実際、当雑誌刊行期間、台湾支部はその会員数を、雑誌創刊時（明41）の二万八千五百九十二人から、廃刊前年（大4）の七万八千五百九十六人へと大幅に増やしている（大橋捨三郎編『愛国婦人会台湾支部沿革誌』台湾日日新報社、昭16・2、116頁）。

（5）これまでに発見されていた五十一冊については、平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究』（研究代表者上田正行、國學院大學、平26・2）が目次一覧と主要本文の翻刻を行っている。

（6）藤村の「或男の話」については、森英一「「或る男の話」論」（『島崎藤村研究』第四十号、平24・9）に内容の紹介と考察が行われている。

（7）引用は『与謝野晶子評論著作集　第十七巻』（龍溪書舎、平14・11、50頁）に拠った。

（8）詩の初出末尾には「九月」と注記されているが、これは経験時ではなく、晶子が体験を思い出して詩を執筆した時期を指していると考えられる。

（9）引用は『鉄幹晶子全集　10』（勉誠出版、平15・11、108～109頁）に拠った。

（10）「解題」『鉄幹晶子全集　9』（勉誠出版、平16・2、480頁）

（11）「『台湾愛国婦人』という雑誌」（『国文学　言語と文芸』第125号、おうふう、平21・3）

（12）なお、逸見久美は『台湾愛国婦人』掲載作品である「新訳栄華物語」について、その内容にも「寛の協力がかなり加わったのではないか」との推測を行っている（『新版　評伝与謝野寛晶子　大正篇』八木書店、平25・8、150頁）。

(13) 引用は『与謝野寛晶子書簡集成　第一巻』（八木書店、平14・10、2 26頁）に拠った。上田正行も既に同晶子書簡を引用の上で、当雑誌の原稿料が良かったことを指摘している（「解題「台湾愛国婦人」という雑誌の意義」『平成25年度國學院大學大学院特定課題研究報告書『『台湾愛国婦人』の研究』（研究代表者　上田正行、國學院大學、平26・2、18頁）

(14) なお、現在までの発見分『台湾愛国婦人』には、北原白秋の作品掲載は確認できない。

(15) 『与謝野晶子と周辺の人びと』（創樹社、平10・7、8頁）

(16) 第六十三巻（大3・2）「本誌に対する諸名家の感想」では、晶子は具体的な名前を挙げて雑誌寄稿者を推薦している。表紙の画は「石井柏亭、藤島武二、高村光太郎、有島生馬、梅原良三郎」、論文は「阿部次郎、大佳嘯風、平出修、山路愛山、上田敏、小山内薫、長谷川天渓、柳宗悦、三宅雄次郎、丘浅次郎、桑木厳翼、美濃部達吉」、小説は「永井荷風、田村俊子、森田草平、正宗白鳥、武者小路実篤、木下杢太郎、森鴎外、久保田万太郎、平出修」、短歌は「増田雅子、三ケ島よし子、原田琴子、原あさを」に依頼してはどうかという提案である。同記事には晶子の他、二十二名の著名人の感想が掲載されているが、通り一遍の返答も見受けられ、具体的な人名を掲げて寄稿者を推薦しているのは、晶子ただ一人である。ここには、彼女の同時代人への評価（好み）の一端が伺えるとともに、雑誌の質向上に協力的な晶子の様相が見てとれる。

［付記］

本稿は、科学研究費補助金（基盤（C）課題番号24520217　研究代表者・樫原修）の助成を受けた研究成果の一部である。

『台湾愛国婦人』第六十一巻閲覧の許可を頂いた、財団法人半線文教基金会台湾文化資料館館長・劉峰松氏に御礼申し上げます。また資料の探索にあたっては、魏徳文氏（南天書局）、阮文雅氏（東呉大学助理教授）、阿部由理香氏（台湾大学法律学院博士課程後期）、国史館台湾文献館の協力を得ました。ここに記して謝意を表します。